博 士（文 学） 水 野 優 子

学 位 論 文 題 名

Although Clauses in English Discourse: A Functional Analysis

（英語の談話における *although* 節－機能言語学的分析）

学位論文内容の要旨

本論文の目的は、英語の although 節についての包括的な記述を行なうことにある。although 節は、他の副詞節には見られない特殊性を持つことが知られている。例えば、理由、様態、目的、時を表す副詞節などと異なり、although 節は焦点化することができない。また、他の副詞節に比べて主節との結びつきが弱いことが指摘されている。譲歩節全般について最も包括的な分析を行なったKönig は、although 節は少なくとも三つの種類の譲歩関係、すなわち、標準譲歩（standard concessive）、修辞譲歩（rhetorical concessive）、訂正譲歩（rectifying concessive）を表すことができ、このうち訂正譲歩は常に後置 although 節に導かれる、と主張している。

しかし、although 節について断片的に言及する研究はあるが、although 節自体の研究はきわめて少なく、使用されたデータも不十分であった。このため重要な問題が未解決なまま残っている。第一は、提案の説明力に係わるものである。従来の研究は概ね分析者の作例に依存していた。このため、例えばKönig が提案した３種類の although 節が、実例にあてはまるのかが不明なままである。さらに、３種類の用法のうち、どの用法の頻度が高いのかも明らかではない。第二は、前置と後置の違いである。先行研究では、副詞節一般の傾向として、一つに、前置節は先行文脈と関連付けられる傾向が強いが後置節はその傾向が弱いこと、さらに、前置節はより従位接続的であるのに対し後置節は等位接続的であることを指摘している。しかし、although 節も同じ傾向を示すのかどうかは明らかにされていない。

本研究は、次の四点に焦点をあてている。第一は、Königが提案した although 節の３分類が実例ではどのように具現するのかを調べることである。第二は、前置と後置の although 節の用法及びその頻度の違いを明らかにすることである。このため、まず、although 節の３用法が前置節と後置節で分布がどのように異なるのかを調査する。第三に、先行文脈との関連の仕方をパターン分類し、それぞれのパターンの頻度の違いを明らかにする。第四は、前置 although 節の方が後置 although 節よりもより従位接続的であるかどうかを具体的に検証することである。

本論は、言語資料として、主に電子コーパスの新聞記事を用いているが、必要に応じて、ラジオ英会話番組のテキスト、小説、雑誌、及び英語母語話者から提供された例文も用いている。although 節と先行文脈との関連のパターン分類には、Prince、Birner &Ward が提唱した情報構造の理論を適用している。

第一章は、本論文の目的を明らかにし、本論のキーワードである四つの意味関係、すなわち「対比」、「標準譲歩」、「修辞譲歩」、「訂正譲歩」、三つの情報的地位、すなわち「談話新情報」、「談話旧情報」、「推論可能情報」、そして等位・従位接続の説明を行なっている。第二章は、主な先行研究の譲歩節、及びalthough節の分析を概観し、その不備を指摘している。

第三章は、although節の用例を2006年8月16日付けの電子コーパス、Lexis Nexis、の英字新聞から収集し分析している。結果として、前置・後置although節は、用法の種類に差はなく、違いはそれぞれの用法の頻度にあることを報告している。すなわち、前置although節は標準譲歩と修辞譲歩だけではなく、訂正譲歩、対比、発話行為の用法があること、後置although節は標準譲歩、修辞譲歩、訂正譲歩だけではなく、対比と発話行為の用法があることを観察している。しかし、前置と後置although節では最も頻度の高い用法が異なっており、前置 although 節の大部分は標準譲歩を表すのに対し、後置although節の大部分は訂正譲歩を表すことを報告している。さらに、訂正譲歩には三つの下位クラス、すなわちCanceling Assumption（想定の取り消し）、Weakening Validity（妥当性の弱化）、Exception（例外）が同定されている。

第四章は、第三章で用いた196例のalthoughの用例に基づいて、前置・後置although節を情報構造の観点から比較している。まず、107例の前置although節の内、76例(71%)が先行文脈と関連し、さらに、前置although節と先行文脈との関連の仕方として、(i)談話旧情報を表す、(ii)推論可能情報を表す、(iii)推論可能な開放命題（Open Proposition）と焦点（focus）を表す、(iv)対比を表す、の四パターンがあることを観察している。一方、89例の後置although節の内、先行文脈と関連しているのはわずか15例（17%）である。後置although節と先行文脈との関連の仕方には、(ii)推論可能情報を表す、(iii)推論可能な開放命題と焦点を表す、(iv)対比を表す、の三パターンのみが観察され、前置although節に見られる(i)談話旧情報は後置although節には見られない。

第五章は、前置・後置although節を等位・従位節らしさの観点から比較している。後置although節は四つのパラメータ、(A)主節から統語的に独立できるか、(B)独自の発話内効力(illocutionary force)を持てるか、(C) 主語の省略を許すか、(D)命題内容が前景化されるか、の全てにおいて等位接続的ふるまいが許されるが、前置although節は(A), (C), (D)のパラメタに関して常に従位接続的にふるまうことを示している。一方、although節に限り前置・後置節の両方において命令文や修辞疑問文といった主節現象が許される事実を観察しており、これは他の副詞節にはない特性である。

第六章では、結論が述べられている。

本論が主張する主な論点は以下のものである。前置・後置although節にはその用法の使用頻度に大きな違いがあり、前置節では標準譲歩、後置では訂正譲歩の頻度が高いこと、前置節の７１％は先行文脈と関連があったのに対し後置節では１７％に過ぎなく、前置節で多く見られた談話旧情報は後置節では見られなかったこと、さらに、後置節は四つのパラメターすべてで等位接続的であったが、発話内効力をもつ可能性については前置節も等位接続的にふるまうことができることである。

学位論文審査の要旨

主　査　　教　授　　高　橋　英　光

副　査　　准教授　　野　村　益　寛

副　査　　准教授　　瀬名波　栄　潤

学位論文題名

Although Clauses in English Discourse: A Functional Analysis

（英語の談話における *although* 節－機能言語学的分析）

本論の成果は、つぎのように要約できる。第一に、前置と後置の although 節の違いは、用法の種類にはなく、用法の頻度にあることを発見したことである。前置 although 節の大部分は標準譲歩を表すのに対し後置 although 節の大部分は訂正譲歩を表すことが、明確な数値データに基づき明らかになっている。第二に、訂正譲歩の although 節は、これまで単一のカテゴリーと考えられていたが、実際にはそうではなく、新たに、三つの下位クラス、すなわち「想定の取り消し」、「妥当性の弱化」、「例外」の存在を示したことである。第三に、主節現象が前置節においても容認される実例を提示したのは、「主節現象は後置節でのみ許容される」という副詞節一般についての定説に大きな修正を迫るものである。

加えて、Prince、Birner &Ward の情報構造の理論を、although 節と先行文脈の意味関係の分析に適用することにより、後置 although 節と先行文脈の関連は、(ii)推論可能情報を表す、(iii)推論可能な開放命題と焦点を表す、(iv)対比を表す、の三パターンであり、前置節に見られる(i)談話旧情報は後置節には見られない、という独自の観察を得ている点は高く評価できる。

本論は、審査付き学術誌に掲載ずみの２本の論文を基盤とし、さらに、第四章の一部は、当分野では国際的に定評のある CSLI Publications の言語学論集、Empirical and Experimental Methods in Cognitive/Functional Research、に掲載されることが決まっている。この事実は、本研究が国際水準に達していることを物語っている。

ただ、本論には多少の不備があることが指摘された。英語使用国間の although の用法の違いについて考察が及んでいないこと、訂正譲歩の定義にやや不明瞭なところがあること、加えて、although 節のなかの主節現象についての制約が十分に説明されていない点が指摘された。しかし、これらは、本論の先駆的研究としての価値を少しも損なうものではなく、むしろ今後の発展可能性を示唆するものである。これらの課題については、

水野氏自身も十分に自覚しており、新たな方法でデータ収集し、研究を深化させる構想をもっていることが口述試験で確認されている。

本論が、英語のalthoughの基本文献として参照されることは明らかであり、although節のみならず譲歩節、副詞節、そして等位接続と従位接続の研究に大きな貢献をすることは疑いがない。

本委員会は、申請論文を慎重に審査し、また口述試験を実施して十分に審議を重ね、全員一致して水野優子氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。